

佳作

ずっと伝えたかった言葉

宮城県 岩出山高等学校二年 佐藤 寿姫

「今までごめん。」

そう言えたのは高校へ入学してもうすぐ一年が経とうとしていた時でした。

始まりは中学校三年生、受験シーズン真っ只中の時でした。なかなか志望校が決まらず、私はイライラしていました。将来のためにも今の自分の成績より少し高いレベルの高校を志望して受験しましたが、結果は悪く落ちてしまいました。自分の不甲斐なさと、もう少し勉強をすれば良かったという後悔、親の期待に応えられなかった悔しさ、親のがっかりした様子にイラつく自分、様々な思いが心の中で交錯し、今にも消えてしまいたい思いました。そのせいか日に日に親への態度が変わっていききました。母は何も悪くないのに、心の中でそう思っています。母は何か冷たい言葉で母を責め立てました。そんな中でもいつもと変わらず優しく接してくれました。その優しささえもあの時の自分には辛かったです。辛さ、悲しさ、怒り、さまざまな自分の感情と葛藤しなが

ら勉強し、志望していた高校とは別の高校ですが無事合格することが出来ました。それが今の岩出山高校です。やっと今までの辛い日々が、母や自分自身との戦いが終わる。そう思ってた私はとても喜びました。

高校へ入学して半年が経とうとしていた時でした。初めは上手く友達を作れるか不安でドキドキしていましたが、中学の頃からの知り合いも多かったため、とても楽しく充実した毎日をおくることが出来ました。しかし上手く馴染めずにいる友達もいました。高校のルールに合わせられず謹慎になったり、休みがちになってしまったり、辞めていく友達が多くなりました。一人、二人と辞めていき、入学当初の輝きはなくなっていました。その頃からみんなも私もバラバラになってきたんだと思います。今まで通りみんな一緒にいたいと思っっている人、新しく知り合った人と一緒にいたい人、そんな小さなすれ違いから喧嘩してしまい、気まずい雰囲気の中私もあんなに楽しかったはずの学校も行きたくなくなり、友達への不満やイライラの捌け口がなく母へ八つ当たりしてしまい、受験の時のギスギス感が再び私を襲いました。ある時母がすごい高熱を出して寝込んだときがありました。まともにも立っていられなくて起きるのがやっとでした。そんな状態でも母は私のご飯や洗濯、家事をしようとしていました。母とは気まずいままですが、さすがの私も母を止めました。

「私が代わりにやるから寝てて。」

すぐく無愛想な言い方でしたが、このときの私には精一杯でした。しかし普段めったに家事をやらない私は、料理はもちろん洗濯も出来なくて私が母の変わりになるのはとても難しいことでした。そんな不格好な私の姿を見て母は嬉しそうに微笑みました。料理に洗濯、掃除など当たり前に見えていることでも、実際にこなしてみるととても難しく、母は毎日頑張っているんだなあと思ったら、私の悩みなんて凄く小さなものに見えてきました。

私の考えている事は母にお見通しでした。これからの友達関係、互いにどう思っているのか、自分はどうしたいのか、色々考えていると母が

「心の中に溜め込んだ部分を全てさらけ出しても側にいてくれる人が寿姫にとって大切な友達になるんじゃないかな。」

と言いました。その言葉に背中を押されて友達と向き合おう、そう決心できました。そして友達と話し合い

「今までどおりにはいかないかもしれないけど、お互い大切な友達だからこれからも仲良くしていこうね。」

と言ってくれて仲直りできました。その友達とは今も相談や話を聞いてくれてとても助かっています。ああ、あの時母が言っていたことはそういうことなんだなあと思

いある言葉を伝えました。

「今までごめん。」

なかなか言えなかった言葉をやっと話すことが出来ました。どんな時も私のために尽くしてくれて、それなのに気づくのが遅くて、ありがとうより先にごめんなさい。

そして勉強も悩みも気持ちの持ちよう、やる気を出せば気持ちはいってくる。という母の教えにも気がつきました。母に友達との関わりの中で大切なことを気づかされて私は、ほんの少し素直になれた気がして気持ちの持ちようが変わったと思います、新しい自分で前に進んで行こうと思います。